

# 本文章已註冊DOI數位物件識別碼

- ▶ 日本語教育の場に見られる日本語・中国語の誤用—教室活動から見た言語慣習をめぐって

doi:10.29714/TKJJ.200106.0010

淡江日本論叢, (10), 2001

作者/Author：孫寅華

頁數/Page：206-218

出版日期/Publication Date：2001/06

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200106.0010>



*DOI Enhanced*

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



# 日本語教育の場に見られる日本語・中国語の誤用

## —教室活動から見た言語慣習をめぐって—

淡江大学日本語学科副教授

孫 寅華

### 1 はじめに

大学における日本語指導の場面では、一見ごく普通の言葉が、しばしば誤用されたり、変な訳文になったりすることがよく見うけられる。

○「先生、鉛筆で書いてもいいですか。」

「いいですよ。」

といった誰でも意味が正しく取れる会話とは反対に、

○「これ、おいしいですよ。食べませんか。」

「あ、いいです。」

と、〈いいです〉の本来の意味と食い違った用法もあるのに困っている学生が少なくないようである。結局「食べる」と言っているのか、それとも「食べない」と言っているのか当惑するのである。これは、あくまでも言語慣習に起因していると思われる。従って、元の日本語の意味と対応する中国語訳が会話として通用しにくくなる。

「言語慣習」というと、周知の通り、それは文法ルール（構文論）や語の意味（語彙論・意味論）や話者の心理的・社会的背景及びモダリティ（語用論）などにも関わると思う。

本稿では、「言語慣習」全体にわたる考察を研究対象とするのではなく、実際の日本語指導現場でよく見られる、とりわけ習熟度の低い初、中級段階の学生が誤用する頻度の高い事例を取り上げ考察を加え、それと対応する中国語と比較してみることにする。

他方、筆者が担当する中国語会話（日本の麗澤大学からの交換留学生）の指導で、例えば、〈我見面他〉というような構文的誤用や、〈捷運要比公車快〉〈車子走掉了〉のように、文中に〈要〉〈掉〉があってもなくてもよさそうな、学生側にとっても教師側にとっても頭を悩ます問題にぶつかることがある。それがきっかけで、自分自身の母国語をもう一度考え、見直すことができ、日本語を教えるのに参考になることが多い。

本稿は題目のように「教室活動」で見受けたものを中心として考察を行うので、まとまりがないとのそしりを免れないと思うが、日本語教育における問題の一つの解決手段として役立てることを目的とする。

## 2 教室活動で見た日・中両語の干渉

筆者が担当している「日文習作（一）」と「日本語会話（一）（二）」の授業で、学生が特に把握しにくいのは、副詞や形容詞、また慣用語の意味／用法などである。その外、可能表現としての「可能動詞」と物事の状態を示す「自動詞」との使い分け、そして、ほぼ「自・他動詞」区別なしに考えられる中国語との対応などがある。

日本語教授における色々なハンディキャップをどう克服するかという問題には枚挙にいとまがない。そのうち、とりわけ気がかりな箇所を次のように取り上げてみた。

### 2. 1 「一を始め」

日華辞典によれば「一を始め」はほとんど〈以～為首〉〈～以及〉という訳文になっている。

(1) 魯国を始め諸国を廻った。(？ 以 魯國 為首 周遊了列國。)

(2) 部長を始め社員全体が参加した。(部長 以及 全體職員都參加了。)

「例文（中国語訳文を含む）は『永大當代日華辞典』によるもので、『？』は筆者がつけたものである。」

(3) 運動会ではマラソンを始めいろいろな競技が行われる。(？運動會中 以 馬拉松 為首 舉行各式競賽。)

(4) 留学生はアジアを始め世界各国から来ている。(？留學生以亞洲為首來自世界各國。)

(5) このホールはコンサートを始め各種のイベントに利用されている。(？？？)

「例文（3）（4）（5）は日文習作の教材『身近なトピックによる表現練習』（1988 専門教育出版）に出た例文、中国訳は教室で学生の表現である。」

上の例文から見ると、学生は辞書に頼って習得した中国語の意味（例文（1）を参照）をそのまま例文（3）（4）（5）に反映していると思われる。「？」で示しているように辞書に載っている例文（1）の中国語訳文が不自然である上、教師からの適切な説明を受け

ていないと、学生は辞書から学んだ、なまかじりの知識ですべての文に通用すると誤解してしまう。例文(3)(4)の訳文に不適切性を生じたことや、更に、(5)に対して、学生はなかなか適当な訳文が見当たらず苦境に陥ったのもそこからだと言えよう。

筆者担当の二年生習作と会話のクラスで、例文(5)にあたる中国語を学生に日本語訳させる場合は、

○ 這個大廳用來作為演唱會、以及各種活動之用。

(このホールはコンサートを始め、各種のイベントに利用されている。)

→ このホールはコンサート及び各種のイベントに利用されている。

のように「一を始め」の代わりに「及び」や「や」を用いることが圧倒的に多い。それは「一を始め」を用いるには、元々認知不足の場合が多く、正しく応用することが難しいと推定されるからである。本来、孤立語といわれる中国語は膠着語である日本語とは完全に一対一というように対訳出来るものではない。が、本稿は翻訳のテクニックの研究ではなく、単純に教室現場で気づいた誤用の背景になるものを探り出し、日本語教授にあたって、参考にすることに焦点を置く。

辞書などにおける狭義的、不完全である中国語の解説により生じた言葉の誤用が、初・中段階の学生に特に目立つという点は日本語教師として無視できない。学生が言葉の習慣や慣習を認知することから応用するまでの力を養える様になるのは大難問であり、教師が知恵をしぼる所でもあろう。

日本語学科で初級日本語の後半になると「可能」表現の文法概念が導入されるが、

○ 生のものが食べられない。(不敢吃生的食物。)

助動詞「れる・られる」で示す可能の形は学習の上では困難ではないようである。ただし、逆に〈不敢吃〉という中国語を学生に日本語訳させたら、何か「食べる勇気がない」等との日本語が出てきた。それはまだ成績のいい学生の答えだが、〈不敢〉にあたる日本語は習ったことないと愚痴をこぼす学生が少なくないようである。これはあくまで、日本語の文法を丸暗記し、完全にその意味合いを理解していないことを示唆していると思う。良く考

えてみると、日本語の「可能」の表現には主に次の二つの意味があると考えられる。

①人間が持っている能力や性質をあらわす。

○わたしは自転車に乗れます。(我會騎腳踏車)

②状況がその人にある行為をすることを許し、可能にすることを表わす。

○ここは遊泳禁止だから、泳げません。(此處禁止遊泳、所以不能遊)

一方、中国語では上の例のように、ほぼ〈會・能〉で日本語の可能表現と対応する。従って、初級段階の学生は、主観的に母語の干渉を受けて、「れる・られる」で表わす日本語の可能表現は中国語では必ず〈會・能・可〉と対応すると思うようになり、〈不敢〉にある本当の意味―「できない」を見逃してしまい、元々勉強した日本語が応用できないことになってしまったのである。

## 2. 2 「窓が開きません」

言葉の役割はコミュニケーションができるようになることにある。が、学生が教室で勉強した日本語を実際の会話の場にあたって使用すると、正確に意味が取れなかったり、自然の会話の流れになれないのはなぜだろうとよく疑問が湧いてくる。恐らく学生は教室で基本文型や文法を習って応用練習のチャンスがあまりないからだと推察する。

(6) A : すみません、窓を開けてください。暑いから。(麻煩開一下窗、好熱)

B : はい。あ、開きません。(好的...啊、打不開)

文中、「開ける」「開く」はそれぞれ他動詞と自動詞である。「開きません」はどうして「開けられません」でいけないのか?の答えとして、中国語を母国語とする人にとって意識の薄い、どうも不思議でたまらない自・他動詞という使い分けがある。

思えば、日本語の自動詞「開きません」は「窓を開ける」動作が終った時点で窓が閉まったままの状態であることを表わしている。ところが、中国語では〈打(開)不開〉の〈打・開〉は動作を示す、ほぼ日本語の他動詞「開ける」にあたる動詞である。また、〈打(開)不開〉は意味上〈不能開啓〉で、〈不能〉はできないに相当する意味であるので、日本語の「可能」表現を連想するのも無理はないと思う。

しかし、「開けられません」は2. 1 可能表現でも述べたように、「主体」(行為者)が「開ける」能力を持っているか、或いは、客観的に窓を開けるのを許されるかという意味合いを示している。

学生の学習は文法に偏りがちであり、言葉の基本的な意味以外の習慣的な使い方が分からないし、学ぶ機会もないので勉強上行き詰ったりして、うまく応用できない。

同じ可能の表現で、筆者は麗大生の中国語を専攻する留学生（注1）にテストをしたことがある。「開きません」を中国語に訳すと〈不能打開〉（開けられません）〈不會打開〉（開けません）という違った意味になってしまった。理由を考えてみたが、やはり日本語における自・他動詞と対応する中国語がないことに起因すると思われる。

『中国語学新辞典』によれば、中国語の「能願動詞」にはいくつかのグループがある。そのうち、可能を表わすものは、〈能・能・會・可・可以・可能〉等がある。これらは、ほぼ同じ意味範疇に属するが、意味のニュアンスは単語によって異なるとも述べている。〈能〉と〈會〉は、主観的な能力による可能を表わす点で共通するが、〈會〉の意味する能力は主として、練習や訓練を経て会得した技能をいい、一般的能力をいう〈能〉とは同一ではない。例えば

〈不能在圖書館裏說話〉の〈能〉は客観的な条件や道理から判断した「許可」の意味を表わす一方、〈這個雜誌不會是他的〉の〈會〉は客観的な条件によって「可能性」の有無を示唆する。（注2）

このように自動詞句を他動詞や可能の表現に誤用したりする中国語を母語とする人には、もう一つひんぱんに見られる誤用がある。受身の使い方である。

「感動した」を「\*感動された」と間違える共通の誤用がいちばん目立つのである。これはあくまでも中国語における〈我被感動了〉のように、「被字句」の影響を受けた典型的な代表例である。

〈被（b e i）〉は受身文と思われる。〈我被父親罵〉（父に叱られた）〈我被選為班長〉（班長に選ばれた）、等のように〈被〉が見られる。

実は、中国語では〈被〉のほか〈蒙・叫（教）讓〉などでも受身文とみなされる。又、主語や話者、或いは、関係者に不愉快な感じを与える動作や行為でないときは基本的に「被動」（受身文）を使わない。近年、いわゆる欧化語法の影響を受けてこの伝統的な受身文の表現も次第に変化しつつある。（『中国語学新辞典』p75）〈被感動了〉のような中国語は〈被〉を使っても「不愉快な気持ち」の表現ではないのである。麗大生でよくある〈\*我感動了〉のような不自然な表現もおそらく日本語で「感動する」自動詞文のニュアンスが強いからであろう。

一つの言葉はそれを母国語とする人でもその深層に潜む意味を理解しないと「開きませ

ん」や「開けられません」或いは中国語の〈打不開・不能開・不會開〉のような使い分けが分かるはずはないと思う。

## 2. 3 「ちょっと」と「すこし」

「2. 1」「2. 2」で述べたニュアンスによる誤用や間違いと違って、「ちょっと」と「すこし」は意味上モダリティや「場面的添加」(注3)に関係することから起こった誤用がよく見られる。筆者が教室活動で会話シチュエーションを説明し、A・B会話のやり取りの中で、「ちょっと」の後に( )を入れ、その中に適当な言葉を学生に書いてもらった。

### ◎ 文房具屋で

(7) A : すみません、このボールペン 黒いのはありませんか。

B : ええ、ちょっと ( )。

学生は「ちょっと」における「場面的添加」等の認知が不足するため、( )には、ほぼ「待ってください」と書き入れた。それはまったく中国語の発想による表現だと思う。

○A : 請問這原筆子有黑的嗎

B : 好的、請等一下。

### ◎ 道を尋ねる

(8) A : 三越デパートへ行きたいんですが、どう行けばいいのですか。

B : あっ、ちょっと ( )。

( )に少数以外はほとんど(7)とおなじように「待ってください」との答えだった。学生の理由は「Bが道の行き方を考える」とのことであった。

「ちょっと」は日常会話で使用頻度の高い副詞である。中国語では〈一点・一下・少許〉等の意味がある。例えば、「ちょっと待ってください」(請等一下)、「日本語がちょっと話せる」(會說一點日文)のような「単純修飾」(注4)の使い方を理解するのは難しくない。が、例文(7) B「ちょっとない」(8) B「ちょっとわからない」の中国語は直訳すれば次のようである。

(7) B 〈\*没有一點〉(注5) (8) B 〈\*有點不知道〉、どちらもおかしく、Aの対話にはならない。

彭飛が『日本人の言語慣習に関する研究』(注6)で指摘するように、「ちよつと」は「ちよつと右」「もうちよつとで終る」のような物理的に量や程度の少ない様を表わす以外に、また人間関係において添加的・暗示的に、日常会話を和らげたり、強めたりする役割を果たしている。「ちよつとわからない」「ちよつとない」「ちよつと」は「ない」と結びつき、「ちよつとない」と、一語(連体詞的)の形で使われることもある。そのときは、更に強調する意味がある。例えば、「ちよつとない悪党」「ちよつとないチャンス」のように、「ちよつとない」は「なかなかない」の意味である。また、「これ、ちよつとかわいい」のような意味使いがある。量や程度の意味が薄く、聞き手の注意を喚起する意図が色濃い。

今まで述べてきたように、「ちよつと」は「場面的添加」から生じた意味合いの誤用が多いようである。

次に、「ちよつと」と相似する「すこし」を並べて比較してみる。学生は母国語の干渉を受けて、正確にこの二つの副詞を区別できないようである。『例解新国語辞典第五版』では、次のように書いている。

ちよつと:数量や程度、時間などがわずかであるようす。ほんの少し。ほんのしばらく。...

(略)

すこし:数量が多くないようす。程度が小さいようす。

二つの語の基本的な意味はほぼ一致するように見える。「ちよつと」は口語的で、「すこし」は書き言葉としてよく使われる。「ちよつと」より「すこし」の方がやや丁寧のように感じられる。

○ すこし食べてください。

○ ちよつと食べてください。

例のように、副詞修飾の場合、お互いに取り替えても意味上変わらないし、理解にも困難がない。次の学生の誤用例を見てみよう(日本語作文)。

\* (9) もうずっと前のことだから、すこし思い出せません。

これは

(9a) もうずっと前のことだから、ちよつと思い出せません。

の誤用である。学生は「ちよつと」における「場面的添加」の意味が分からないし、作文だから、「すこし」の方が適当だという考えから間違えたのであろう。この場合、「量」と



いうより、むしろ相手を不愉快に思わせないようにするため、和らげて表現する言葉の習慣に過ぎない。一方、「すこし」は量や程度が多・少・強・弱を示すが、添加的、暗示的な言葉の機能はまったく持っていない。こういった論理的概念をどのように初・中級段階の学習に導入するかは教師にとっての課題であろう。

## 2. 4 「貸してください」

中国語を母国語とする人は「貸してください」「借りてください」という方向性を持つ動詞を理解するのがどうも苦手なようである。「貸す」「借りる」の中国語表現は動詞〈借〉の後に対象となる名詞をつけてすむのである。(例えば〈借你〉〈借我〉など)そこで、初級レベルでよく「貸してください」を「借りてください」に間違えるのである。この場合、「貸してください」を一つの熟語として暗記すれば難しくないと思われるが、筆者は言葉の側面から考えて、誤用を生成する原因を探りだし、明らかにしようと思う。

まず、「方向性」から考えてみよう。主体 A を中心にして、A にむかって働きかけをする動詞は「向心動詞」(注7)と認められる。

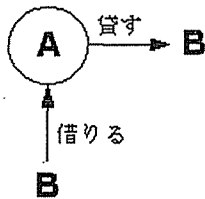
○A が B に本を借りた。

→A が借りた。(A借入)

反対に、主体から離れる「貸す」は「離心動詞」(注8)と認められる。

○A が B に本を貸した。

→A が貸した。(A借出)



次に文法から見てみよう。「～てください」は発話側が相手に、ある行為/動作をしてもらうときに使う。

○ 貸してください。

○ 食べてください。

これは発話側が相手に「貸す」「食べる」など、指示を与えるときの丁寧な言い方で、柔らかい「命令形」とも言えよう。

上に述べたように、中国語では動詞〈借〉は方向性を示していないので、〈你・我・他〉という代名詞をつけて方向を示す。日本語では「貸す・借りる」は方向性を有するので、対象である「わたしに」を省略しても文の意味が変わらないのである。

方向性を持つ動詞は「貸す・借りる」のほか、「預かる・預ける」のように対になっている動詞もある。この二つの動詞は「自・他動詞」と間違えて扱われることが一番多い。

とにかく、学生は学習の上でいろんな問題にぶつかっていると思う。

教師の立場としては、学生のぶつかる問題に対して適切な解決方法を見出すのが大切ではないのか、とつくづく感じている。

## 2. 5 「\*黒板の上に字があります」

教室活動で、母語の干渉が目立つもう一つの例がある。それは位置、方向を示す「～の上」である。

(10) つくえ (の上) にコンピューターが置いてある。

桌上放了電腦。

(11) 淡水河 (の上) に橋がかかっている。

淡水河上有一座橋。

(12) この本を本棚に置いてください。

把這書放在書架上。

(13) 顔にそばかすができた。

臉上長了雀斑。

(14) 壁に絵がかけてあります。

牆上掛了画。

(15) 椅子の上に立っている。

立在椅子上

(16) 椅子にすわっている。

坐在椅子上。

例文(10)～(16)から見ると、場所を示す日本語は、中国語では例外なく、〈上〉で表わされるのがわかる。しかし、日本語例文には「～の上」が出ていないのもあり、中国語と一致していない。

① (10) (11) に「～の上」がなくても違和感はないが、あった方がもっと自然に感じられる。

② (15) は日・中語一致している。

③ (12) (16) は、「～の上」をつけたら、違った意味になる。

④ (13) (14) は、日本語の習慣では「～の上」を使わないのが原則である。

森田良行の分類(注9)では、「上」を四つのグループに分類し、定義している。本稿では、主に中国語を母語とする人が混同しやすい「方向」と「位置」を取り出し、中国語と比較してみる。

森田の説によると、方向を表わす「上・下」は、基準点や視点などから見て引力に逆らう方向を「上」、引力に従う方向を「下」と考えている。つまり、天空側を「上」、大地側を「下」と見るわけである。そして、上・下の判断は人間がなすものであるから、たとえば山頂に立つと、人間を中心にふもとは「下」である。方向性の「上・下」において基準となる線の高さは特に決まっていない。視線の水平方向を基準にして、それより見上げる方向を「上」、逆は「下」と言う。更に、物体の表に何かをつけて、その「表」を(「裏」と相対し)「上」と言うこともある。

「位置」を表わす「上・下」は、ある空間に主体や対象から見て、上方の範囲全体が「上」、下方の範囲一帯が「下」と考えられる。例文(10)(11)(15)は位置を表わす文で、「椅子の上」「河の上」「机の上」は主体上方の空間を指している。(12)(13)(14)(16)は方向を表す文で「本棚に」「顔に」「壁に」は主体の「表面」を意味する。上に言った(12)(16)（「本棚」「椅子」）に「の上」をつけたら、文の意味が変わるのも『「方向」から「位置」に』場所が変わることに起因する。

中国語の場合は、名詞の後ろに〈上〉をつけ場所化する。(注10)(10)～(16)はすべて場所を表す例文なので、対応する中国語は〈臉上〉〈牆上〉... と〈上〉があるわけである。

ここまで述べてきたように、外国語を習得するためには、その外国語の文法や深層意味などを理解した上で、自らの母国語をももう一度見直すべきではないかと筆者は思うのである。

### 3. まとめ

母国語と外国語の言葉の対照比較をするとき、もっとも問題になるのは母語の干渉であ

る。中でも両言語の文字・形態の類似度が高ければ高いほど、干渉効果が著しく見られる。芳賀純『二言語併用の心理』1979 が指摘するように二言語を併用する場合、「複合型」でも「等位型」でも（注 11）両言語間の干渉が生じるのを示している。それは両言語の連想の重なり合い、素の意味の融合という要因が考えられると言っている。つまり、両言語の文字、形態そして語意、及び連想内容の類似性から、干渉が生じるのである。中国語と日本語は漢字や語彙において、かなりの相似性を示している。学習するとき、それに引っかかって、誤用することが多いのである。ところが、すべての誤用は母語の干渉で起こるとは限らない。本稿で取り上げたさまざまな誤用のなかには勉強不足や、習熟度が低いことによるものもあろう。これは特に初中級段階の学習障害を論ずるとき注意するべきところである。

言葉は対照比較の方法を通して、外国語の習得に役立つ。その一方、母国語の認知にも一つの助けとなる。本文の始めに取り上げた中国語のように、〈車子走掉了〉の〈掉〉は中国語を母語とする者でもなかなかうまく説明できない。この場合、日本語から考えればどうだろう。まさに、「一てしまう」に相当し、対応できるように思えよう。もともと中国語では「テンス・アスペクト」という影が薄いと言われている。上のように、日本語と中国語の比較から中国語を母語とする人が「テンス・アスペクト」を認知するためのいい手がかりを見出すことができるのではないかと思われる。

言葉の対照研究では、いまだに未解決の問題が山ほど多い。例えば、〈捷運要比公車快〉という中国語の〈要〉は、無くても意味がほとんど変わらない。次の文を見てみよう。

(17) 新交通システムはバスより速い。

(捷運比公車快)

(18) バスより新交通システムの方が速い。

(捷運要比公車快)

日本語例文を見て、(17) は新交通システムについてどうかと述べている文だが、〈18〉は新交通システムとバスとどちらがいいかと考えて選ぶときによく使われる。この場合、〈18〉の日本語に対応する中国語は〈要〉をつけるのが普通である。こうして見ると、〈要〉の有無は日本語〈17〉か〈18〉を決める上での一つの目安のように考えられる。もちろん、これは筆者の現段階での自説にすぎない。これから、もっと資料を集め、

言語慣習を支配する要因を探り出す研究をしていきたいと思う。言語慣習というと、言語使用者の個人的環境の差異も考えなければならない。上の(17)〈18〉中国語訳文の〈要〉の有無も使用者の習慣に関連するようである。

本稿で取り上げた誤用例は、初中級段階において、学生が教室活動でよく起こした典型的な例である。その外、例えば、「髭がくすぐったい」「千円が痛い」といった感情形容詞にかかわる言葉の意味用法に困っている学生もかなりいるようである。それについての考察は、この次に譲りたい。

(本稿は、2000年6月に淡江大学「两岸學術教学研討会」で中国語で口頭発表した内容を加筆訂正したものである。)

## 注

1. 筆者が麗澤大学留学生班「中国語会話」を担当
2. 『中国語学新辞典』光生館 p73
3. 彭飛『外国人を悩ませる日本人の言語慣習に関する研究』和泉書院  
場面に応じて、ある語を添加することによって、文の意味を和らげたり強めたりすることができる。
4. 前掲「物理的に数量や程度の少ないさまを表わす」
5. <一点>を〈没有〉の前に置き換えれば、正しい文になるが、元の意味はすっかり失われて、「すこしもない」という意味になってしまう。
6. 前掲
7. 吉川武時が言う「方向性を持つ動詞」は幅が広い。「現代日本語動詞のアスペクト」(金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』)  
本稿では「向心」「離心」を焦点に、便宜上「向心動詞」「離心動詞」と呼ぶようにする。
8. 前掲
9. 森田良行『基礎日本語2』角川書店 昭和55年  
1. 向を表す 2. 位置を表す 3. 階段を表す 4. 連続している言葉の「前後」
10. 『現代中国語辞典』香坂順一 光生館
11. 芳賀純 1979『二言語併用の心理』P.27-P.28

「二言語併用において、等位型と複合型と呼ばれる類型がある。前者は二言語のおのおのについて独自の連想のパターンを所有している場合で、後者は二言語に対して共通の連想のパターンを所有している場合と考えることができる。(略)複合型は常に二言語が同時に使用されている環境で、二言語を習得した場合に形成される二言語併用の類型である。(略)等位型は時と所を異にして二つの言語を習得したような場合に形成される二言語併用の類型である。」

## 参考資料

- 彭飛 「外国人を悩ませる日本人の言語慣習に関する研究」 和泉書院 (1990)  
(p.1-p.69)
- 芳賀純 「二言語併用の心理—言語心理学的研究」 朝倉書店 (1977) (p.16-p.43)
- 高見澤孟他 「はじめての日本語教育・1—日本語教育の基礎知識」 アスク講談社  
(1998) 第二刷り
- 高見澤孟他 「はじめての日本語教育・2—日本語教育の基礎知識」 アスク講談社  
(1996)
- 森田良行 「基礎日本語2」 角川書店 (1980) (p.45-p.52)
- 高橋太郎他 「日本語の文法」 講義テキスト (1996) (p.57-p.115)
- 市川保子 「日本語誤用例文小辞典」 凡人社 (1997) (p.123-p.189)
- 中国語学研究会 「中国語学新辞典」 光生館 (1979) 第五版
- 湯廷池 「日語語法與日語教學」 台灣學生書局 (1999) (p.31-p.109)
- 潘金生 「日語教學研究論文集・中日両国語の比較—一次動詞「bei」を使う受動文と意味上の受動文をめぐって」 商務書局 (p.191-p.200)
- 日本語教育学会編 「日本語教育事典」 大修館書店 (1982)
- 文化庁 「外国人のための基本語用例事典」 第二版
- 香坂順一 「現代中国語辞典」 光生館 昭和57年3月
- 中川正之 「日本語と中国語の対照研究—日中語対照研究会の紹介を兼ねて」 日本語学 vol.4 明治書院 (1985)
- 師範大學國語教學中心 「實用視聽華語①②③」 正中書局 (1999)